シェパードにオオカミを入れる理由―――

もともと牧羊犬だったジャーマンシェパードは現代では間違いなく最も優れた作業犬の一つである。軍用犬、警察犬、災害救助犬、麻薬探知犬など、様々な分野で高度な作業を任されている。では、シェパードの流れである牧畜関係の作業犬・ハーディングドッグについて少し考えてみよう。

FCIにおけるハーディンググループの語源は「Herd集める」で家畜をまとめて管理するという意味だが、もともとのハーディングドッグは、家畜の群れをまとめる交通整理的な作業（Herd）に加え、オオカミやクマそして人間（泥棒）から羊や牛を守る（Guard）ことが任務だったため、防衛本能・警戒心・自立心が強く、闘争心・戦闘力・威嚇力・粘り強さも十分持ち合わせていた。そうでなければ自発的にオオカミの群れやヒグマを撃退し遠ざけることはできなかったわけだ。このタイプの犬を護羊犬と呼ぶが、これに家畜の移動時の管理を含めたものを家畜追い犬(キャトルドッグ)という。これらの犬は、いわば用心棒でありガードドッグである。ところが、ヒトはクマやオオカミを駆逐しながら牧羊地を広げ経営の大規模化を果たしたため、これらの用心棒タイプの犬は必要なくなり徐々に衰退した。それに代わって栄えたのがジャーマンシェパード、コリーなどの牧羊犬である。これらの犬は護羊犬・家畜追い犬から防衛本能・自立心・戦闘力・威嚇力を削ぎ落とし、人に従順で依存心の強いタイプに変えられた結果だ。すなわち、非常に訓練性能が高く人の指示によってコントロールしやすい犬となった。絶滅したオオカミやクマなど気にせず広がった牧羊地を縦横無尽に走り回ることができれば身体が大きい必要もなく、ボーダーコリーという現在アジリティーで大活躍する犬種も生まれた。これらの牧羊犬は、その発生起源からしても、同時に優れたコンパニオンドッグ(家庭犬)でもある。

ハーディングドッグ（FCI　ハーディンググループ）牧畜関係の犬
　護羊犬――――――家畜の管理＋用心棒（ガードドッグ　対オオカミ・クマ）
　家畜追い犬――――家畜の管理＋トランスポーター＋用心棒（対オオカミ・クマ）
　牧羊犬――――――家畜の管理
　　・小型化　防衛本能・警戒心縮小　コントロール性能高い
　　・ジャーマンシェパード、コリー、ボーダーコリーなど

ところがベアドッグというのは、交通整理ではなくあくまで用心棒タイプの犬である。十分なクマやオオカミの生息地周辺で護羊犬のブリーディングが実戦レベルで現在まで脈々と続いていればそれを用いる手がある。そしてその犬をベースに新たな犬種を作る手もあるだろう。しかし、犬種自体が少なく、辛うじて残った犬

も今やショードッグタイプと化しているので本来の護羊犬としての気質が残されていない場合がほとんどのようだ。その中でも、ヨーロッパ西部のエストレラ産地にカオ・ダ・セラ・ダ・エストレラ(エストレラマウンテンドッグ)という生粋の護羊犬がある。優れたガードドッグで軍用犬としてもブリーディングされ、現在なおオオカミの群れを相手に羊の護衛をしているらしい。「らしい」というのは歯切れが悪いが、なかなか扱いが難しい犬種でほとんど原産国以外に輸出されておらず、恐らく日本にも入ったことがないのではないか。それほどの犬なので、おいそれとベアドッグに使えるわけではない。それに対し、ロットヴァイル地方でローマ時代からキャトルドッグとして最高のパフォーマンスを見せたといわれるロットワイラーは、上述エストレラよりはるかに入手しやすい犬種だろう。ある本の犬種紹介では「活力旺盛、防衛力抜群。鋼の筋肉と運動神経を持つ強い犬である。その反面、平和を好み、心が広く、忠実で従順で仕事熱心。マルチ作業犬の長所は全て備えている。警察犬、盲導犬、救助犬、何をさせても誠心誠意努める」とある。(『世界の犬種図鑑』エーファ・マリア・クレーマー著)この2犬種に関しては、恐らく、そのままベアドッグとして流用可能だと思えわれる。2犬種の共通点は、仔犬の頃からしっかりと躾けないと手に負えない犬になるという点。敵に回せば脅威だが味方につければ力強い。これは、ベアドッグに適した犬の根源的な共通点とも言えるだろう。

一方、使役犬・作業犬としてヒトと組んで何かをやらせようとするとき、そう簡単にジャーマンシェパードをはずせない。実際は、ベルジアン・タービュレンやマリノア、コリーも候補だろうし、私個人としてはダッチシープドッグという日本では非常にマイナーな犬に興味があるのだが・・・・・現実的には、どんな犬を最強の使役犬・ジャーマンシェパードに掛け合わせてヒグマ対策の用心棒タイプに最適化すればいいかという問題に突き当たる。あれこれの可能性を考えた末、結局、犬の原型・オオカミという結論に落ちるわけだ。コントロールが容易になったシェパードに自立心や防衛本能を与えて用心棒に戻し、その代わり躾や訓練が難しくなることを容認するという選択である。狼犬は概して自立心が強いため、勝手に動いてしまう可能性はあるが、必要なときに勝手に動いてくれる可能性もある。育て方を間違えると手に負えない犬になるが、しっかり育てればよき相棒になり、クマにとって無視できない脅威ともなりうる。猟犬は山の中でヒグマを引き止める作業であり、失敗がまだ許される。しかし、ベアドッグは不特定多数の人を背にヒグマを威圧し追い払うのが任務のため、失敗が許されない。そのためにある程度の大型犬を選択し、コントロール性能を一定レベルで犠牲にする必要があるのではないか。犠牲にした犬の性質はベアドッグハンドラーが理解を深め、犬の扱いを上達させて補う方向。それが最も合理的なスタンスであると私は結論した。

ベアドッグをつくるもう一つのルートが、猟犬由来のイヌを流用あるいは改善し仕立てていく方向だ。北米のWind River Bear Instituteのキャリーハント氏、そしてその流れを汲むNPOピッキオの田中純平氏が、この方向でおこなっている。用いている犬種はカレリアンベアハウンド(カレリアンベアドッグ)。これは、カレリア地方でクマ猟に用いるために作出・ブリーディングを繰り返されたイヌである。猟犬としての資質は優れるが、猟

犬ならではのいろいろな性質からコンパニオンドッグ(家庭犬)としては概して向かない。先述の「ベアドッグに適した犬の根源的な共通点」からすれば、この点はベアドッグとしてネガティブな要素ではない。ただ、現在のヨーロッパでは、ショードッグタイプのカレリアンベアハウンドが人気を博しており、その系統は、この犬の猟犬としての気質を削ぎ落とし家庭犬として成り立つようにブリーディングがおこなわれているので、別物と捉えた方がいい。猟犬としての資質とは、やはり強い防衛本能・警戒心・自立心・闘争心などで、ハーディングドッグの護羊犬の資質に似ている。カレリアンベアハウンドに見るいろいろに関して、知床自然センターにおけるアイヌ犬のベアドッグにも同様のことが言える。

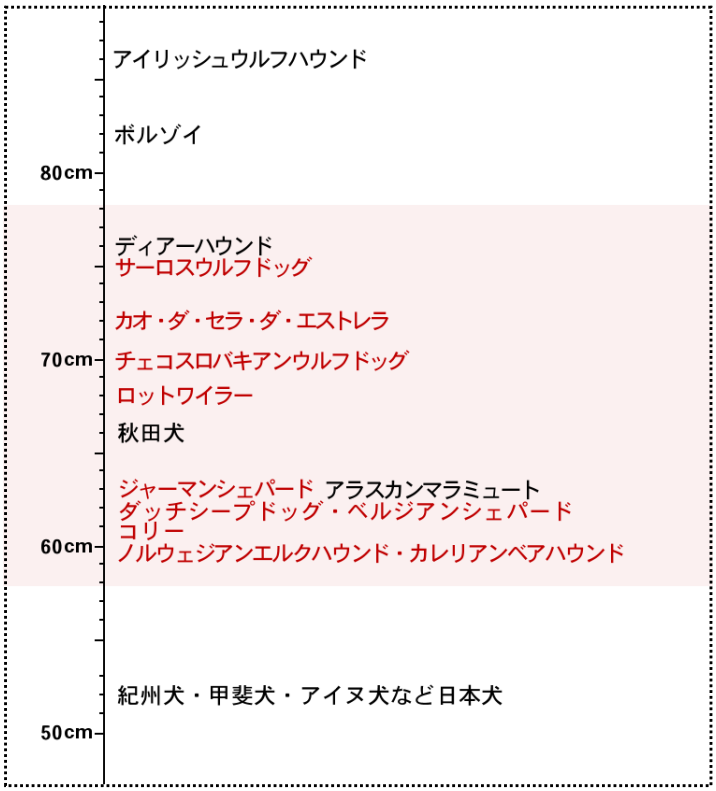
(↑)カレリアンベアドッグ。北米におけるオンリーシュメソッド

狼犬を導入するメリットとしては、後述する大きさのほかに、群れの意識が強いことからハンドラーおよびパートナー犬との連携が密におこなえること、あるいはヒート(繁殖期)がイヌと異なり年に一回であることなども含まれる。メスのヒート時には、そのメスが使えなくなるとともに、周辺のオスがメスに気をとられ、ヒグマ対策の現場でも注意散漫で使い物にならなくなる可能性がある。したがって、冬期における狼犬の年一のヒートタイミングは実際の対ヒグマ作業上も理想的と言える。

補足)対ヒグマ・ベアドッグのサイズは？

野生動物は相手の数と大きさを十分認識でき、そこから行動の判断をする。都会のカラスでも、繁殖期にでさえ攻撃するのは通学途中の小学生や買い物帰りの奥さんで、成人男性を攻撃することは非常に稀である。あるいは、オオカミが人を襲うように学習変化した際、やはり襲われるのは女子供である。(オオカミはヒグマ同様、本来的に人を獲物として襲う動物とは考えられないが、人が起こす幾多の戦争で人の死骸が無尽蔵に散乱したり、疫病(伝染病)の蔓延で死体を十分処理できなくなったりすると、ほとんどの肉食野生動物はそれを食べるように意識がつくられる。オオカミの一部に、人が食糧・獲物であると認識し、死肉のみならず生きた人を襲う個体が出ても不思議ではない)　また、4人以上で集って行動している人をヒグマが襲う事例が世界的に稀なことを考えても、ヒグマの追い払いでは追い払う側の数と大きさが影響すると考えられる。

では、対ヒグマのベアドッグの適正なサイズはということになるが、結論をいえば、非常にバランスのとれたロットワイラー前後10㎝。つまり68㎝±10㎝というところだろう。オスのカレリアンベアドッグで体高60㎝。ジャーマンシェパードでそれより少し高い。シェパードベースの狼犬でFCIに認定されている犬種としては、チェコスロバキアンウルフドッグで70㎝、サーロスウルフドッグで75㎝である。80㎝を越えるアイリッシュウルフハウンド、ボルゾイなどのサイトハウンド(オオカミ狩り用の犬)に関しては、北海道の植生では、機敏な動きにもしかしたら支障をきたすかも知れない。肩幅や胸板がしっかりし運動能力の高い犬種となると、上述の68㎝前後と



いう数字を言わざるを得ない。カレリアンベアドッグがヒグマ(ブラウンベア)対策に不十分でないことは北米でもおよそ立証されている。が、最適かどうかは証明されていない。ベアドッグに適した犬種の考察は別途おこなう。

サイトハウンド:アイリッシュウルフハウンド86cm　ディアーハウンド76cm　ボルゾイ82cm
ウルフドッグ:チェコスロバキアンウルフドッグ70cm　サーロスウルフドッグ75cm
キャトルドッグ:ロットワイラー68cm(ガードドッグ)
護羊犬:カオ・ダ・セラ・ダ・エストレラ72cm
ノルディック・ハンティングドッグ:ノルウェジアンエルクハウンド、カレリアンベアハウンド、ライカ　60cm
雑種ベース
牧羊犬:ダッチシープドッグ62cm　ジャーマンシェパード62cm　ベルジアンシェパード62cm　コリー61cm
日本犬:紀州犬・甲斐犬・アイヌ犬52cm　秋田犬66cm
マラミュート63cm

社会化と逃避行動(仔犬期)

野生動物は危険を学んで警戒するのではなく、もともと警戒心が様々な心理に勝っている。いわゆる逃走行動というのが生まれて数週間で現れるが、原則的に、はじめて嗅ぐにおい、見るもの、聞く音に対して逃走する。特に異種の動物に対して敏感に逃走行動を示すが、人工物に対して特別な警戒を示す場合もある。

仔犬の社会化は、前提として逃走行動が解消することが必要で、むやみに逃げなくなった状態から、はじめて慣化・社会化は起きる。ここでの重要なパラメータは好奇心と警戒心であるが、馴れによって両者とも下がり、安心した状態でいろいろな社会化がなされていくことになる。通常、イヌは好奇心が勝り、オオカミやキツネは警戒心が勝る。

実際は、日本では他の犬に対しての社会化とヒトに対しての社会化が欠かせない。暮らすエリアによっては、ウマやウシに対する社会化が必要になる場合もある。仔犬の社会化の適期は4～15週とされるが、オオカミのそれははるかに短く最大で2か月程度と考えられている(Ziemen)。狼犬はその中間と考えられ、生後1～2ヵ月までに十分ヒトといい関係をもって育てられると、ヒトへの社会化はスムーズにおこなわれる。その時期を仮に逃しても不可能ではないだろうが、根気と時間が指数関数的に大きくなるだろう。

ただし、後述するように、ヒトへの社会化が順調におこなわれても、性的成熟に伴い問題が生じる場合がある。子供の頃にヒトに馴らしたオオカミが、のちにヒトに対して攻撃的になり手がつけられなくなる例は少なくない。それは、オオカミがヒトを同族と認識し、オオカミのやり方で接してくるからなのだが、その場合の傾向は、「ある日突然」という共通の言葉に現れる。「ある日突然、ヒトを噛んだ」と。私に言わせれば、そんなことはあり得ない。サインを見落としていただけなのだ。

では、そういう問題を回避するにはどうしたらいいか。じつは、ヒトに社会化させたあと、いわばメンテナンスが必要になってくる。そこに必要な重要な作業が服従訓練なのだ。

社会化と逃亡行動の関係より、ブリーディングにおける問題点が浮上する。オオカミの社会化適期が1～2ヵ月、犬のそれが1～3.5ヵ月とすると、狼犬の場合どちらに近いか？　いわゆるオオカミ率(※)にもよるだろうが、概してオオカミに近いのではないだろうか。魁が秋田のブリーダー（SeriorsStory＝SS）から来たのが生後二ヶ月ちょっと。USケンネル（＝USK）の凛は40日だった。つまり、SSでは他犬や人に対しての社会化までを仕上げて送り出していることになり、USKでは主な社会化を新しいオーナーに任せていることになる。SSの結果は、魁の同胎10頭で見れば、これ以上ないほど優秀だ。10頭のうち1頭飼い主が変わった以外は全てが人社会・犬社会に馴染み、好かれ、それぞれの飼い主が「私の犬が一番」現象になっている。もちろん、私もその一人だ。

犬ならば、2ヶ月何もせず育ってその後譲渡されても何とでもなるだろうがオオカミや狼犬はなかなかそうはいかない。オオカミや狼犬が特別なのではなく、犬という動物が人的淘汰を繰り返された特殊な動物なのだ。オオカミは野生の中で自然淘汰されてきた生きものである。したがって、相応の警戒心を本能的に必要とした。オオカミの子は、厳しい野生の中で全ての作業を悠長にやっている猶予がない。いろいろをいち早く覚え、定着させる必要がある。社会化はその中の重要な作業の一つなのだ。つまり、オオカミの社会化の時期が短いのは、彼らの学習スピードの速さ、学習能力の高さに由来していて、考えようによっては利点である。オオカミの学習能力は、仔犬期の社会化という学習にはじまり、あらゆる場面で、特にスピードにおいてイヌを上回っている。

さて、ブリーディングというのは本来的に血の話・遺伝子の話なので、後天的なあれこれはあまり取り沙汰されないのが普通だ。しかし、上に見たように、社会化適期にイヌとは異なる繊細さを持つ狼犬の場合、ブリーディングとともに、生後2ヶ月の育ち方をどう進めるかも、かなり重要なファクターとなる。遺伝的に素晴らしい犬がつくられていても、この2ヶ月で水の泡ともなりうるわけだ。そしてまた、狼犬に特化した教育方法も模索されるべきかも知れない。血(遺伝子)・幼少期の社会化・教育。これらが三位一体となってはじめて狼犬のブリーディングは語られるべきではなかろうか。もちろん、SS、USKとも、この点において優に合格ラインを上回っている。

※オオカミ率：

交配における単純な計算で求めるオオカミの血の割合を百分率で表したものを慣習的にオオカミ率などと呼ぶ。仮に、オオカミとイヌを交配させると、（100＋0）÷2＝50％。その50％の狼犬とイヌをかければ25％、オオカミをかければ75％、ということになる。後者の交配を何度も繰り返すことにより、オオカミ率99．5％などというほとんどオオカミに近い個体も数値的にはつくれる。これは、オオカミらしさの一つの数値化だが、例によって、この手の数値化はあまりアテにならないことも多い。大まかな指標になることはある。実際に、99％の狼犬が、イヌの性質・外見を1％しか持っていないわけではない。これは総じてメンデルの法則に従う。決まりはないので区切りは人それぞれだが、50％以下の狼犬をLow％、90％以上をHigh％、その中間帯をMid％などと呼ぶ場合もある。ちなみに、魁はLow％、凛は99％を越えるHigh％だが、ベアドッグの資質としては魁がはるかに上手だろう。

イヌとオオカミ

過去における様々な研究や説はさておき、現在の分子系統学的研究（ミトコンドリアDNAの塩基配列の分析）では、遺伝子的に、世界各国の各種イヌと各地のオオカミは種としてその区別が見出せない。つまり、生物学的に「イヌはオオカミである」というのが最も合理的理解となっている。

オオカミとイヌ、どちらが恐い？

オオカミをあまり知らない人は、おかしなデマや偏見で、この動物は悪魔の死者のような残忍な動物で、非常に危険であると、何となく思っていることが多い。その思い込みのルーツの大半は、ヨーロッパの民話や童話、はたまたうわさ話である。肉食動物であるから、獲物を獲るのは当たり前だし、もしヒトが行き倒れていれば、ラッキーとばかりに口をつけるのは自然なことだ。それを凶悪・凶暴扱いされても閉口してしまう。クマと同じで、オオカミを知らない人ほどオオカミをおかしな形で崇拝したり恐れたりするのではないだろうか。

アラスカのデナリの南の森や、デンプスターハイウェイ沿いで、オオカミには何度か接したことはある。多くは遠巻きに囲まれたり警戒されたり、そしてときには迷子の子オオカミとやりとりをしたり、まあいろいろだが、恐怖心をオオカミに対して抱いたことは一度もない。私は、月夜の晩にオオカミのハウリングを聴きながら眠るのが好きで、ただ彼らを心地よく迎えた。彼らの存在を感じカウンターアソールトや鉈に手がいったことはないし、ショットガンの威嚇をしたこともない。

ところが、北海道の糠平湖という人造湖の裏側で、用を足そうとテン場から離れてブッシュに入ったところ、気がついたら数頭の野犬の群れに取り囲まれていた。私はズボンを急いで上げ、腰の鉈を即抜いた。ヒグマでもこんな対応は私はしない。できる限り穏便にやりとりをおこなってすれ違ういつもめざした。ところが、糠平裏の野犬の群れは、直感的にも道理的にもやりとりの利く相手とは思えなかった。いまにもブッシュを割って牙を剥いた特攻隊長犬が私に飛びかかってくるような気がした。それで鉈で即臨戦態勢をとったわけだ。

オオカミに限らず、私はキツネの脇腹をつついたりするが、それで噛まれたり怪我をしたことはない。犬に噛まれ病院に駆け込んだことは、この10年で三度ほどある。オスの柴、オスのアイヌ犬、オスのボルゾイ。全部オスだが、私を噛む犬の大きさが徐々に大型化しているのはちょっと気になる。ボルゾイより大きな犬というと、アイリッシュウルフハウンドかな・・・この犬には不用意に近づかないようにしたい。

ちなみに、ヒグマの大生息地アラスカでは、前世紀後半、犬に噛まれて死亡した人はクマに襲われ死亡している人の8倍ほど率として存在する。

オオカミとクマとイヌ、どうしてこういうことが起きるかというと、社会化と逃避行動で述べた警戒心の大きさによる。イヌという動物が長年のブリーディング、つまり、ヒトが望んだ人為淘汰よって警戒心を削ぎ落とされてきたことが、逆にヒトへの攻撃をストレートにおこなわせてしまうのだ。警戒心は接近・攻撃を抑制し逃亡行動を誘発する大きな要素だ。

私がヒグマに対しておこなっている「追い払い」も、要するにヒトに対する警戒心を増大させるための行為。ヒトや人里に馴化したヒグマはイヌ同様、危険である。